

敦煌文献とは何か

岩本 篤志

「敦煌文献とは何か」、本書はその問いに答えるべくまとめられた研究書である。

著者の榮新江氏は北京大学・中国古代史研究中心・教授として、また敦煌吐魯番文献研究、東西交渉史、北朝隋唐史に關する著作や編纂物によつて知られている。本書紹介の前にとりあえず敦煌文献について説明をしておく。

一九〇〇年、敦煌莫高窟第十六窟の甬道の北壁から数万点の写本等がおさめられた小部屋が偶然発見された。写経が多かったため、後に小部屋は第十七窟「藏経洞」とよばれる。また、発見された資料の多くは北朝から北宋の初め頃（四三七〜一〇〇〇頃）のもので、漢語のみならずペベット語やコータン語、ソグド語等の写本が含まれており、藏経洞はユーラシア史的タイムカプセルであったと

いってよい。

ただ当初、その価値はほとんど気づかれておらず、藏経洞発見から数年後に英仏の調査隊が資料の一部を得て、国外に持ち出した。そのおり獲得品の一部が北京で披露され、清朝政府はようやく、敦煌残存の写本等を北京に運ぶ処置をとつた。ところがこの間、すでにかなりの資料が藏経洞から持ち出されており、諸外国の調査隊や収集家らの手に渡り、国内外に流出した。その主に藏経洞に収蔵されていた文献を敦煌文献と呼び、その主要コレクションがイギリス、フランス、中国、ロシア、日本に存在する。

簡単に説明すれば以上のとおりだが、実は藏経洞に大量の写本類が眠っていた理由は判然としない。井上靖の名著『敦煌』を思い浮かべる人もいるであろう

榮新江著
辨偽与存真——敦煌学論集
上海古籍出版社
二〇一〇年「七、二〇三頁」

が、今や有力とはいえなくなった一説がモチーフである。

本書の巻頭論文は藏経洞はいつ頃封閉されたのか、またそこに大量の写本類がおさめられていたのはなぜかを探求したもので、各論である他の収録論文の結節点としての役割を果たしている。

著者の敦煌文献に関する代表的な研究書に『帰義軍史研究——唐宋時代敦煌歴史考索』（上海古籍出版社、一九九六年）、『鳴沙集』（新文豊出版公司、一九九九年）、『敦煌学新論』（甘肃教育出版社、二〇〇二年）がある。『帰義軍史研究』は敦煌を統治した帰義軍節度使の動向と敦煌文献の關係を編年整理によつてうかがいあがらせようとしたものであり、後の二点は敦煌文

中国研究所 会員制度のご案内

当研究所は、中国およびアジア諸国との友好を願う立場から、現代中国の政治、経済、社会、文化、歴史を科学的に研究する民間研究機関として、1946年1月に創設されました。以来今日にいたるまで、出版物の編集発行、図書館の運営を活動の柱として、歴史を重ねてきました。

中国研究者および広く中国に関心のある方々の参加と交流を目的とした個人向けの研究会員制度を設けております。是非この機会にご入会ください。

60年以上の歴史を有する研究所として、会員の皆様により充実したサービスを提供できるよう努力してまいります。

なお、2010年12月1日付で、「社団法人」から「一般社団法人」へと移行しました。名称は変更いたしますが、事業内容等に変更はありません。今後ともよろしくお願い申し上げます。

【研究会員】

会費：9,600円(1年間)

学生会員：5,000円(1年間)

【会員特典】

- ・当研究所発行の学術月刊誌『中国研究月報』の無料配布
 - ・当研究所主催の公開講座等の参加料割引
- 詳細はお問い合わせください。

一般社団法人 中国研究所

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp

URL: <http://www.soc.nii.ac.jp/ica/>

献に関する論考を集めた論文集である。ここでとりあげる『辨偽与存真』はその第一論文集『鳴沙集』の増補版にあたる。

本書の構成は論文(一四編)、回顧と展望(六編)、書評(一七編)、その他(五編)となっており、『鳴沙集』に加えて一篇が増補され、最新の研究動向を反映した構成となっている。

ここでは収録されている論文を概観したい。なお、論文表題は排列順のまま、便宜的に四分割した(I~IV)。また『鳴沙集』に無い増補論文に*をくわえた。

- (I) 敦煌藏経洞の性質及其封閉原因
(II) 所謂李氏旧藏敦煌景教文献二種辨偽
李盛鐸藏敦煌写卷の真与偽

狩野直喜与王国维——早期敦煌学史上的一段佳話*
驚沙撼大漠——向達の敦煌考察及其学术

- (III) 敦煌写本辨偽示例——以法成講《瑜伽師地論》学生筆記为中心*
有関敦煌本禅籍的几个問題
敦煌本禅宗灯史残卷拾遺
有関敦煌本《歴代法宝記》的新資料——積翠軒文库旧藏略出本* 校録*
俄藏《景德伝灯録》非敦煌写本辨
《俄藏敦煌文献》中的黑水城文献*
(IV) 一九世紀末二〇世紀初俄国考察隊与中国新疆官府*

附録・李木齋氏鑑藏敦煌写本目錄
追尋最後の宝藏——李盛鐸旧藏敦煌文献調査記*

術意義*

関于北大所藏常書鴻致胡適的一封信*

(I)「敦煌藏経洞の性質及其封閉原因」

巻頭論文では蔵経洞とは何かが論じられる。封閉が解かれる前の詳細は不明だが、わずかな記録と封閉後の蔵経洞の状態、搬出された敦煌文献等の資料が手かりとなる。敦煌文献には敦煌の複数の寺院の蔵書印が捺された文献や寺院に関する文書とおぼしきものが多数見いだせるので、それが敦煌の寺院の動向と無関係ではないこと、また敦煌文献に見られる紀年などから蔵経洞の封閉時期が十一世紀前半であることは早くから指摘されてきた。

では寺院は何らかの災難を避けるため蔵書類を隠したのか（避難説）、または不要の經典類をおさめる故経所に蔵書や故紙を廃棄したのか（廃棄説）、理由の推定によって封閉時期も異なることになる。

著者は従来注目されていなかった新資料をあげて自説を展開する。まず、經典数点を包む経帙が多数存在し、唐代の經典目錄にもとづいた整理記号を記した経帙が存在するほか、汚損のない完全な写本や什宝に値するものがあることなどから、封閉が解かれた時点では一定の目錄学的体系をもって典籍が「保管」されていたと考え、「避難説」をとる。また敦煌文献にみられる書込から敦煌の三界寺と經典補修を行う僧侶の活動を見出し、藏経洞内の資料群の形成はそれら活動と関わりを持つと論じる。

また、封閉時期についてフランスのペリオは西夏が敦煌に侵攻した一〇三五年と考えたが、その後、西夏期以降の「敦煌文献」の存在を指摘するものもあつた。しかし、著者は「非敦煌文献」を注

意深く取り去り、敦煌文献のうち書写年代が最新かつ明確なのは一〇〇二年のものであり、西夏侵攻のかなり前に藏経洞が封閉されたと推論する。

ちなみに、現在も廃棄説に関わる論考を発表している研究者に帰義軍期の研究で知られた土肥義和がおり、吐蕃支配期の敦煌仏教の研究で知られた上山大峻も廃棄説を主張しており、日本では廃棄説が有力視されている。本論文が目目される所以である。

(II)「李盛鐸藏敦煌写卷的真与偽」他二篇

清朝政府が敦煌残存の写本を北京に運ばせた際、指揮をとったのが李盛鐸である。官僚で蔵書家でもあつた李盛鐸はそこから優品を選び私蔵したとされ、收藏品をしばらく内外の学者の閲覧に供していたが、一九三〇年代に海外に売却した。ただ有名な文化財には贗造品がうみだされやすい。著名な敦煌学者、藤枝晃は李盛鐸旧藏敦煌文献と称するものにその類が含まれることを示唆している。

三篇はこの李氏旧藏文献をめぐる論考

である。ただし、ほとんどの李氏旧藏文献の収蔵先は長年明らかにされず、羽田亨らの論著に附された数点の写真が知られていたにすぎなかった。著者はそれら古写真と北京大学所蔵の李氏鑑藏敦煌写本目錄等を持ち、その史料の価値に迫っている。また、著者は日本滞在中に、京都大学の羽田記念館（現・ユーラシア文化研究センター）所蔵の羽田亨旧藏写真帖に李氏旧藏文献の写真が含まれていることに気づき、『海外敦煌吐魯番文献知見録』（江西人民出版社、一九九六）で紹介し、その後に池田温、落合俊典らが展開した古写真に依拠した研究のきっかけを作った。「追尋最後の宝蔵」はその成果を整理したものである。

なお、「追尋」原載論文発表の一年半後、李氏旧藏文献をとりまく環境は一変した。二〇〇九年春、羽田と交流があつた五代武田長兵衛ゆかりの武田科学振興財団・杏雨書屋は七六〇点ほどの未精査の西域出土文献を収録した『敦煌秘笈・目錄冊』を刊行、現在、影片冊が陸續と刊行中である。李盛鐸が海外に売却したと

いう収集品がこの敦煌秘笈の冒頭四三二点にあたることは、本書の「真与偽」論文によって傍証可能であり、なかでも著者が扱った景教文献については近年公表された洛陽の経幢との関係が目目されている。なお、敦煌秘笈については評者の小文「杏雨書屋蔵「敦煌秘笈」概観」（西北出土文献研究）第八号で紹介している。

(Ⅲ)「敦煌写本辨偽示例」他五篇

敦煌文献は早くに中国外に流出し、その名を知られたため、数多くの贋造品が生み出されることになった。では真贋をどのように判別し、その特徴や書写年代をどのようにみきわめるのか。この六篇は個々のテーマを掲げてはいるが、いずれもそうした視点から読むことができる。

うち三篇の論文の関心は禅宗文献にある。とくに北宗禅については敦煌文献の研究によってはじめてわかったことが多し。著者は先行研究を踏まえつつ、それまで扱われていなかった敦煌禅宗文献を組上にあげ、その性格を浮き彫りにしている。また、その過程で資料の特徴と上

述の三界寺の經典補修との関係に言及する。

題名に「俄蔵」を含む二篇では、ロシア蔵「敦煌文献」に別時代、別地域の古文獻、古文書が混在していることと、それをどのように弁別するかが論じられている。

(Ⅳ)「一九世紀末二〇世紀初俄國考察隊与中国新疆官府」他三篇

敦煌文献は発見からすでに一世紀がすぎ、また世界各国に分蔵された状態にある。ゆえに二〇世紀における学術史や国際関係とも無縁ではない。四篇の論文では「敦煌学学術史」の観点から二〇世紀の各国の調査やその学術交流史の一部をあきらかにしている。

以上、限られた字数の中で評者なりに概観してみた。このほか収録される「回顧と展望」「書評」「其他」は敦煌学研究史として、文献ガイドとしても有用である。また、巻末の二〇〇九年九月までに発表された著者の論文目録は北朝隋唐期

の事物や事象に関わる研究者すべてに有用であろう。

敦煌文献の研究がはじまって一〇〇年がすぎた。しかし、著者がとりあげたロシア蔵敦煌文献や李盛鐸旧蔵文献の例にみるように、その全貌が見渡せるようになったのはつい最近のことである。著者が書評で述べているように、実は敦煌文献はまだまだ謎だらけの資料群なのである。(いわもとあつし 新潟大学)

■第7回 TOKYO 漢籍 SEMINAR

俗書の啓蒙力

▼3月12日(出)10時30分～16時▼学術総合センター一橋記念講堂(千代田区一ツ橋2-1-2)【プログラム(永田知之)】書儀——中世の文章作成マニュアル(永田知之)／善書——華僑華人の人生訓(山崎岳)ほか

▼参加定員五〇〇名(申込順)▼参加を希望される方は、「漢籍セミナー申込み」と明記し、氏名・所属・連絡先等をご記入の上、下記宛先へはがき(〒100-8302)又はFAX可にて、京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究所センター(〒606-6265 京都市左京区北白川東小倉町47)☎075-75336997(FAX6999)メール kaseki@kyoto-u.ac.jp